

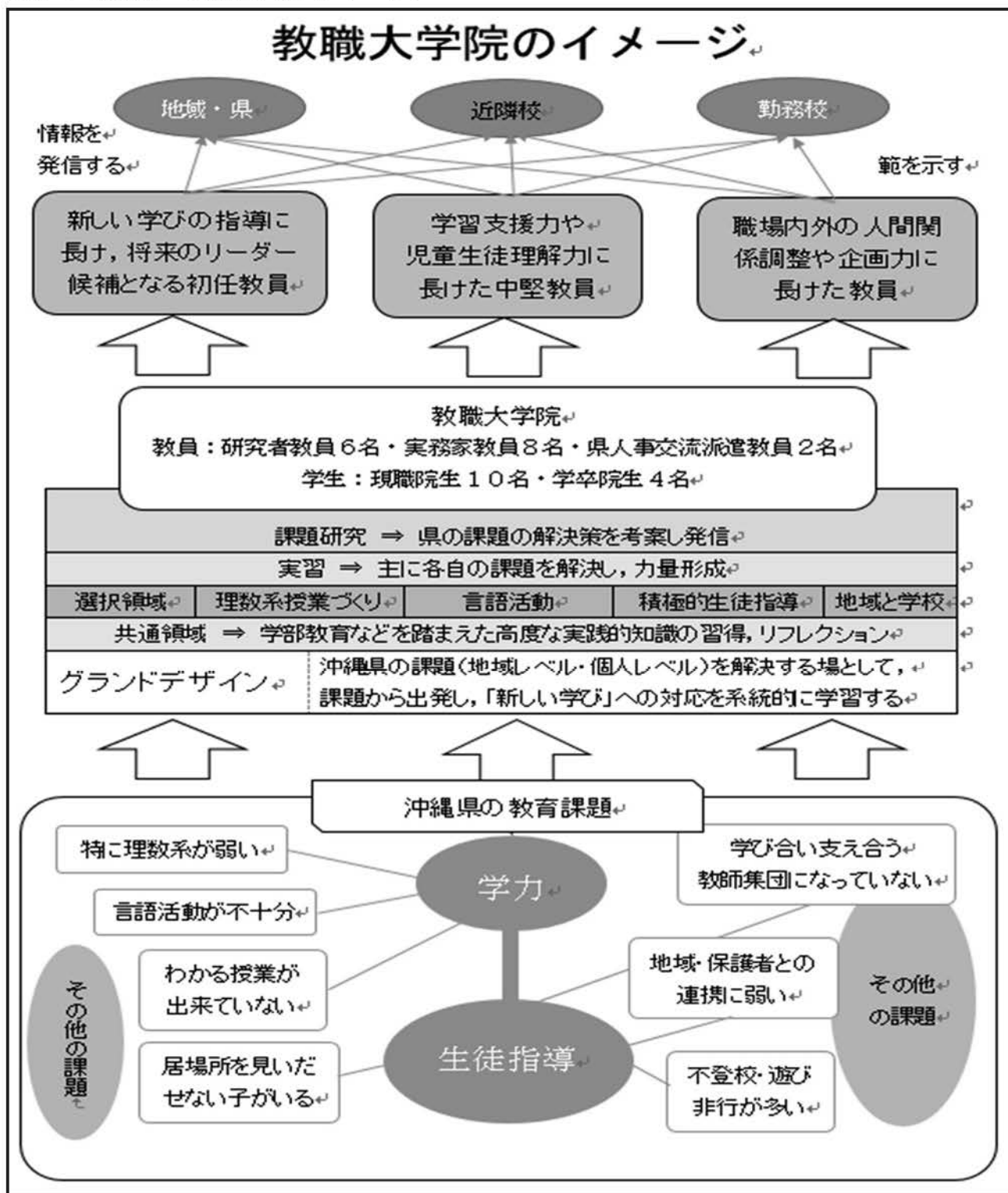
琉球大学学術リポジトリ

教職大学院の実習

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2017-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36908

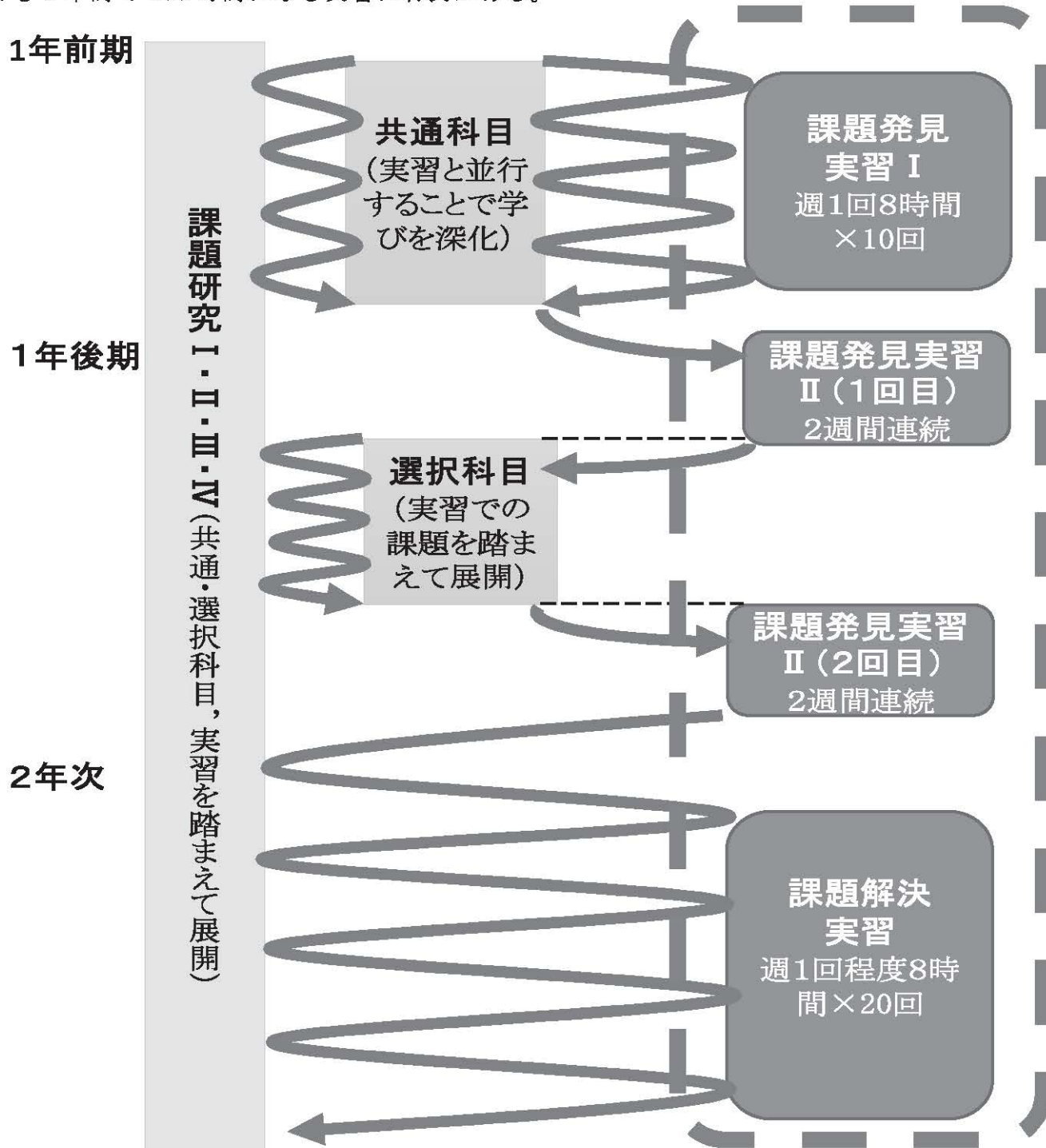
教職大学院の実習

琉球大学大学院教育学研究科専門職学位課程高度教職実践専攻（以下「教職大学院」）では、合理的・反省的思考ができて、学習指導、生徒指導、組織運営に高度な実践的能力を発揮する教員の養成を目指している。



【 400 時間の実習 】

教職大学院の教育課程は、①共通・必修科目、②実習、③課題研究から成っており、中でも2年間で400時間になる実習に特長がある。



課題研究—共通／選択科目—実習の関係図

【注】課題研究—実習の関係は紙面の都合で図示していないが、授業および実習を通して課題を発見し、その課題を研究して実習で検証する、という関係になっている

【 実習の概要 】

実習名称	課題発見実習 I	⇒	課題発見実習 II	⇒	課題解決実習
時期	1 年次前期		1 年次後期		2 年次前期・後期
実習施設	附属小・中学校		主免許校種の 連携協力校 2 校		現職院生は勤務校 学卒院生は連携協力校
形態	観察実習中心		観察＋教壇実習		教壇実習中心
目的	自分自身や勤務校，沖縄県の課題を見出す。		前期の実習で発見した課題に対して，大学での学修を活かしながら解決策を試行する。		課題解決に向けて特定校（勤務校，または連携協力校）で，より確かな解決を目指す。
実習期間	半期型 週 1 回 8 時間×10 日間		期間集中型 2 週間連続(8 時間×10 日)×2 回		8 時間×20 日間(実習校と調整して 20 日間の実習を随時設定)
単位	2 単位		4 単位		4 単位
学生配置	2～3 名からなる実習班を編成し，実習班ごとに各小・中学校で実習		2～3 名からなる実習班を編成し，実習班ごとに各 2 校(原則として同一校種)で実習		原則として 1 実習校に 1 名の院生を配置
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・研究校の授業や児童生徒の観察を通して，自分自身や勤務校，沖縄県の課題を見出すために，附属学校での実習とした。 ・研究校の授業研究に参加し，授業の振り返り方の参考にするために，附属学校での実習とした。 ・隣接校種の授業や児童生徒を観察することで，教育内容の連続性や児童生徒の発達的变化を理解するために，小学校および中学校の両方での実習とした。 		<ul style="list-style-type: none"> ・後期前半に 1 回目，後期後半に 2 回目の実習を配置することで，1 回目の実習を振り返り，大学での学びを活かしながら 2 回目の実習でさらに深められるよう，2 回目の実習とした。 ・2 回目の実習は，規模や地域の異なる学校(同一校種)で行うことで，多様な環境でより汎用性の高い解決策を模索できる。 ・本時に至る児童生徒の様子や学びを把握するために期間限定集中型とした。 		<ul style="list-style-type: none"> ・現職院生は勤務校で，学卒院生は 1 年次後期に配属された連携協力校で継続的に実習を行うことで，より確かな課題の解決を行う。 ・課題研究のための試行や問題解決もここでを行い，検証授業等の形で提案する。
	問題の発見	⇒	解の探索	⇒	解の評価⇒解決

【 平成 28 年度の実習 】

1 課題発見実習 I

(1) 課題発見実習 I の成果と課題

成果	<p>① 校種が異なる学校での実習により、院生の研究課題意識への影響が大きく、院生が自らの研究課題についての修正、具体化、明確化につながる実習であった。</p> <p>② 附属小学校では発達段階の幅に応じた丁寧な指導場面を数多く観察することで、院生の研究課題への影響がみられた。</p> <p>③ 附属中学校では実習期間中の授業観察により、附属中職員も普段より丁寧な授業振り返りができた。また授業研究会での、院生の積極的な発言は良かった。</p>
課題	<p>① 初めての実施であり、実習のねらいに基づいた運用についての課題がある。「課題発見」は附属学校の「課題」ではなく、院生の研究課題であることや「協働」の内容について事前の共通理解を十分に行う。</p> <p>② リフレクションの時間が確保できるような実習日の設定にする。(校内研究日を減らす。)</p> <p>③ 院生と附属学校職員との顔合わせの時間を確実に設定する。</p>

2 課題発見実習 II ①

(1) 課題発見実習 II ① の成果と課題

成果	<p>① 連携協力校の先生方が多様な刺激を受け、教科指導や校内研において院生の動きが連携協力校へ還元できた。</p> <p>② 行政出張へ同行するなど、授業外でも連携協力校へ協力・協働ができた。</p> <p>③ 院生に教科の一単元を全部授業してもらえて良かった。</p> <p>④ 院生に多くの学級に入ってもらい、様々な授業及び活動に取り組んでもらえた。</p> <p>⑤ 院生や教職大学院教員の授業から、得るものが多く自校の専門的知識が高まった。研修意欲へつなげることもできた。</p> <p>⑥ 学級担任と一緒に授業・学級づくりをすることで、自己の授業の見直しにつながった。</p> <p>⑦ 院生各自の研究テーマの明確化・具体的化が進んだ。</p>
----	--

課題	<p>① 現職教諭と非現職院生の経験や知識の差への配慮、工夫が必要。</p> <p>② 今回も一定程度できていたことであるが、何らかの形で連携協力校の課題等への解決の一助となる取組も期待される。</p> <p>③ 学校行事との兼ね合いが課題である。</p> <p>④ 院生の研究テーマの共通理解の方法（授業をみる視点等）</p> <p>⑤ 1週間の院生の動向が分かるような工夫が必要。</p> <p>⑥ 授業参観をする際の事前の連絡を密にして欲しい。</p>
----	---

3 今後の実習の方向性

(1) 課題発見実習Ⅰ

① 事前調整と共通理解

11月から来年度に向けての調整に入り、複数回、調整の場をもつことで、今回、課題として挙げられた事柄についての改善を図りたい。特に課題発見実習Ⅰの目的と附属学校での協働が充実した実習になるようにしていく。

② 協働を通じた実習

協働を通じた実習とするために、コミュニケーションの場（振り返り等）の時間を確保する実習日の設定にしていく。

(2) 課題発見実習Ⅱ

① 連携協力校の課題への取組

協働を通じた実習によって、日常的な個別の指導への対応等はかなりできていた。連携協力校が抱える課題について、2週間という期間の中でできる対応と実習期間以外でできる対応について検討していく必要がある。

② 学校行事との兼ね合いへの対応

行事が立て込む時期での実習であり、学校行事等があることを前提で実習に入るので、学校の教育課程に合わせた対応がさらに求められる。行事等で多忙な中での実習自体は有意義である。

③ 院生の動態・連絡の工夫

大学教員の学校への授業参観については、各連携協力校の受入担当者と教職大学院側で連絡を十分にしていく。

院生の動態は、院生が主体となって、連携協力校との連絡、調整にあたるようにして、各連携協力校を担当する大学院教員がまとめる。

④ 現職教諭と非現職院生の指導力等の差を配慮した態勢づくり

現職とのペアの機会を増やしていく配置になるように連携協力校、教職大学院で工夫していく。

(3) 今後の実習

平成28年度の1月末から2月中旬にかけて課題発見実習Ⅱ②に取り組む。

平成29年度からは現職院生は勤務校での課題解決実習に入る。非現職院生は連携協力校での課題解決実習に入る。また非現職院生はインターン実習を選択した場合、4月当初から連携協力校での実習に入り、連続する形で課題解決実習につなげることになる。